

がついたものであることは周知のことであるが、意味も「覚ゆ」自体に自発の意味があつたため、古くはそれに「らる」をつけるということはなかつたようである。ところが、芭蕉はこの外にも例えば

辺土の遺風忘れさるものから殊勝に覚<sup>おぼえ</sup>らる（四二・四）

## 封建時代の女性像

——近松の「おさん」をめぐる——

茂手木恵子

「をとゝしの十月中の亥の子にこたつあけた祝儀とて、まあこれ爰で枕並べてこのかた、女房の懷には鬼が住むか蛇が住むか、二年といふもの巢もりにして、やうくは、様をち様のおかげで、陸しいめをとらしい寢物語もせうものと、楽しむまもなく、ほんにむごいつれない。さほど心残らば泣かしやんせく……」

悲しいうつたえの言葉である。周知のごとく、これは近松門左衛門の「心中天網島」に出てくる「おさん」のくだきの名台詞といわれている。他の女性に心を奪われ、子までなした仲の自分をかえりみない夫に対する悲しい抗議の言葉といつてよい。しかも、二百年も前に生きたこの悲劇の女性の生涯は、すでに過ぎ去つた風俗のながめとして見すごせないものを含んでいるように思われる。そこに女の悲しみと

のように「覚えらる」という表現をとつている。こういう云い方がいつごろからあつたものか。芭蕉は感覚的な新しい用語法をする人なので、こういった点にもそれが現れているのかどうか、大方の御示教をいただきたい。

（本学専任講師）

負い目がある。

近松の世話浄瑠璃の多くは、その没後もしばしば改作されたり、歌舞伎化されたりして、その適応の強さを示してきているが、近代になつて特に原作に対する新しい解釈が試みられることになつた。ごく最近の事例としても、雁治郎・扇雀による「曾根崎心中」や、北条秀司の脚本「堀川波の鼓」、「大経師普曆」の映画化「近松物語」などがある。このような近松物の再演や新訳が脚光を浴びるという事実は、やはり二百年の歳月をへだててなお色あせぬ普遍的な人間性が把らえられているからであらう。「おさん」は現代にも生きている。

元禄時代は、近世ルネサンスとして絢爛たる町人文化の開花期といわれている。けれども、幕府の政策による強力な封建制は、庶民階級への政治的、社会的関与が激しく、個人の行動は五人組制度等の相互牽制によつてくびきをかけられ、人間の自由は天窓の星のように乏しい光を享受するにすぎなかつた。したがつて、町人文化の絢爛たる開花といつても、つまりは限られた自由、紐つきの自由として、ただ官能の花粉を撒きちらしたにすぎない。

近松は武士の家に生まれた。しかも刀を捨てて、当時まだ河原乞食

という侮蔑感を伴わずには受け入れられなかつた芝居者に変身したことは、身分制度によつて人間を価値的に差別した時代であるだけに、その決意は尋常のものとは思えない。それは、近松の好奇であり、生活手段であつたと見ることもできようが、やはり彼の庶民生活よせる同感と、虐げられた暗い人間に対する愛情からの発願と考えるべきであらう。私は作家の純粋な魂を信したい。

近松の世話物に出てくる多様な人間像も、今日の目から見れば、どこか不健康であり、ゆがめられた表情をおびていないものはない。その無慚な結末にしても、類型的な悪役の存在にしても、やはり人間が人間であることへの最後の信頼を持ち合わせていないという、不幸な印象を消しがたい。近松の作品がほとんど実説に取材して想を構えたという事実は、行動はあつても人間的な相互信頼や自我の確立を伴わなかつた当時の人間生活に対して、われわれに遠い距離を感じさせる。しかも、われわれはやはり近松の作品からは感動を与えられる。この奇妙な矛盾は、私にとつては不思議な感銘というほかはない。

「心中天網島」は、近松が死ぬ四年前、六十八歳の作である。愛する夫の心を他の女性に奪われた「おさん」という女性の美しいまでに高められた自己犠牲の精神は、むしろこの作品の眼目ともなつてゐるが、「おさん」によつて強いられる感動の実体は、はたしてどのような性質のものであらうか。

この悲劇は、治兵衛とおさんが従兄妹同志であつたことから、始まる。両親に早く死に別れた治兵衛は、叔母夫婦の世話になり、やがてその娘のおさんと結婚する。二人の子供まで生まれたが、いつしか治兵衛は遊女の小春に心をひかれてしまい、果ては心中までしかねない

ようになつてしまふ。それを悲しんだおさんは、小春に手紙を送つて、夫の治兵衛との縁切りを頼む。小春もおさんの心情を察し、治兵衛に心にもない愛想づかしを言つて、立派にその約束をはたしたが、その時小春はすでに死ぬ覚悟をきめていた。

小春の覚悟を察知したおさんは、それと聞いて慌てる治兵衛を励まし、自分の着物まで提供して、小春を身請けしようとする。おさんの無償の純愛は治兵衛を感動させるが、おさんの切ない心づくしも実父の冷酷な仕打ちによつて破られ、絶望的になつた治兵衛は小春の許にはしる。おさんは二人の子をいだいて、一切を裏切られた未亡人となつてしまふというのが、その荒筋である。

おさんの生き方には封建時代の宿命的な女の暗さがある。社会的に強制された女性道徳、家長としての夫への奉仕を美德とする家族制度の拘束にあつて、おさんもまた、たえず他を見て自己の行動を律し思慮しなければならぬ弱い妻の座からそれることはできなかったが、その愛情の心理の動きには、いきいきとした具体性と輝きがあつた。

治兵衛とおさんとは幼い時から兄妹のようにして育つた仲であるが二人を結婚させたのは、おそらくおさんの両親の意志であつたろう。そして、若い二人がそのような結ばれ方に格別疑いや抵抗を感じなかつたとしても、不思議ではない。人間個人よりも家の存続と繁栄を、個人と個人との横のつながりや信頼よりも、縦のつながりとしての社会秩序の平安が尊重された時代であつたからである。

けれども、そのことは常に生き身としての夫婦間の理解と愛情を保証してゐたことにはならない。ある意味では青春と恋愛の不毛が、忽然として治兵衛の悲劇に種子を蒔く遠因となつたといえよう。それは

さておき、二人の子供を持つようになったおさんは、勝ち気な主婦として一家を切り盛りすると共に、母としての母性愛に幸福な生き甲斐を感じる女性として成熟していった。しかし、治兵衛の心に宿つていた虚隙には気がつかなくつたのである。

おさんの愛情がこのような姿で完成されつつあつた時、治兵衛はふとした機会から小春という遊女を知つたのである。治兵衛が遊女に接した動機はともかくとして、そこに妻には求められない新鮮な官能の世界と情愛の雰囲気があつたことは察しられる。それが悪徳であるとの自省以前に、治兵衛がこれまで無意識にたたみこんでいた恋愛感情はいちはやく点火されたと考えるべきであろう。結婚生活すでに七、八年という倦怠や遊樂への惑いもこの火力を強めることになつたであろう。私はかならずしもおさんに対する不信や嫌悪は認めない。このことは、「維新前二百数十年間に於て都会民衆が自由に行動し得た境域はと言つと、現実界としては、肉の樂園としての吉原や島原や新町等、夢幻界としては、空想の樂園たる歌舞伎劇場、この二別天地の外はなかつた。」という一般的な解説によつても、治兵衛が中流の町人として、このような享樂への誘惑から例外であつたと考えることはできない。しかし、やはり小春との出会いは偶然であつたと思う。

夜ごとに枕の変わる遊女の小春にとつても生きる喜びはほしい。無責任な遊客の中にも真実の愛情を求めようとする。それは小春にとつて、たつた一つの救いの窓である。治兵衛に妻子があることを知つても、小春もまた生きなければならぬ。愛情のはげしさはしばしば犠牲を強いる。小春は自由の身ではなく、自分の力では自分を解放もできないければ、一人で生きていく力もない。その場合、治兵衛の出現

は、小春にとつては愛情の星でもあれば、救い主でもあつた。

にもかかわらず、おさんの懇願によつて、小春は自分の幸福をいさぎよく捨てようとした。ここにも悲しい女がある。直情的で單純な治兵衛はただ小春の裏切りをのしる。右か左かと單純に割りきりがちな治兵衛には、女心のこまやかさも悲しみも充分には理解できない。そこに拘束された愛情にもがき苦しむ元祿女性と、激情的ではあつても優柔な行動力と判断しか持ち合わない元祿男性との対比が妖しい光を放つてくる。悲劇もまた避けがたい構図である。

おさんは近松が元祿の人妻の典型として描いたものだといわれている。それなら、近松は、おさんの中にある何を信じて典型と考えたのであろうか。

おさんは、与えられた環境に順応し、夫に対する絶対服従に生き、自分の悲しみは悲しみとしながらも、家庭生活の平安を必至に保とうと努力するはかない女性である。治兵衛の心がすでに自分から離れてしまつた場合でも、おさんは治兵衛から離れようとはしない。治兵衛を失つては家庭生活が破壊するからである、世間の冷い批評をおそれているからである、というだけではおさんの心情を尽くし得ないように思う。おさんはやはり治兵衛を愛していた。そうでなければ、あの無償の献身は生まれてこない。外に對する思ふくと、生活の計算と、内にある愛情と、おさんの心情の複雑な曲折は、また人妻の位置する人生の修羅ともいえよう。あるいは、忍従と献身の美德のみが放つ光輝ともいえよう。

自己の行動で環境を支配することの出来なかつた小春は、その愛情の矛盾を自己の内部にさし向けようとする。おさんの自己犠牲の精神

は、小春と治兵衛との真実の愛を知った時、自己の内部に解決を求めようとしたのである。自分の幸福は諦めねばならぬ。そして、夫の治兵衛と小春の愛情が偽りのない真実であることを確信するところに、自分の心の満たされない安らぎを求めようとする。疎外された者のさびしい諦念ではあるが、真実は尊重されねばならぬという冷たい願いは生かされようとする。

最初にあけたおさんの悲痛なときは、妻として夫にかえりみられない女性の真実の響をこめてゐる。不幸におとし入れられた女性のせめてもの反抗である。しかしその反抗すらも、小春の真情を知つてからは、同情へと転化している。ここに女心の解きがたい秘密がある。おさんは一人の不幸な女性の命を救うために夢中になつてしまふ。その女性が自分の愛する夫の心を奪ひ去つたものであればあるほど、おさんは小春の救出に熱情をはげしく傾けようとする。おさんは、小春の助命に必要な金額を夫に聞かされた時、「なう仰山な、それですまい」と易し。」とはずんだ言葉を口にしている。しかも、「わたしや子供は何着いでも、男は世間が大じ、請出して小春も助け、太兵衛とやらに一分立てて見て下さんせ。」と夫を励ましさえするのである。夫の面目が立ち、小春の命が救えるのなら、なんでもありつたけの物を提供しようとするのである。

しかし、治兵衛に、「手付渡しして取りとめ、請出してその後かこう  
ておくか内へ入るゝしてから、そなたはなんとなることぞ。」と当然  
の疑問を出されては、さすがにはつと行き詰り「アツアさうじや、ハ  
テナんとせう。子供のうばか、まゝたきか、隠居なりともしませう。」  
とわつと叫び伏し沈むのである。この「隠居なりとも……」のところが

を、文化年間に改作され、現在でも一般に上演されている「増補紙屋治兵衛時雨の炬燵」では、「真実の妹持つたと思うて下さんせ。」となつてゐる。この改筆は、幼馴染の従兄妹同志が愛情の芽ばえもなしに結婚させられた事実即して、おさんの心情を伝えようとしたものであらう。それはさて置き、これはただ小春の救命のことへのみ心を奪われていたおさんの盲点を不意についた言葉であつた。小春の身請後の始末までおさんは考える余地はなかつた。無知というよりは、敵身のおろかさである。「あまりに冥加恐ろしい。この治兵衛には親のばち天のばち、仏神のばちはあたらずとも、女房のばち一つでも将来はよいない筈、許したもれ。」と治兵衛に手をさげられて、おさんは「それを拝む事かいの、手足の爪をはにしても、皆夫への奉公……、サア／＼早う小袖も着かへて、につこり笑うていかしやんせ。」と心を立て直している。

この場面におけるおさんの姿は、もはや不思議な自己超越としてわれわれの息をのませる。献身のおろかさとききにはいつたが、むしろ一種の高貴な魂のかがやきさえある。同情・義理・面目というような、さまざまな契機を含みながらも、それをいっしか超えた唯一の「愛」の姿がある。それはまた近松の博大な人間愛に外ならぬものであろう。愛情のカタルシスがここにはある。

小春と治兵衛はついに心中行を選ぶことになるが、その最後の一瞬まで、おさんへの感謝の言葉を忘れてはいない。そのことがこれを裏書している。二人を離れ離れに死なせた作者の心用意も注意しなければなるまい。

おさんを当時の女性、あるいは人妻の典型として描こうとした近松

の真意はほぼ理解できたように思う。近松作中の女性には、程度の差はあれ、このような愛情の献身を描かないものはない。

後の作品ではあるが、「今頃は半七さん……」のくどきで有名な「酒屋」のおそのは、自分が死んでしまえば、夫は好きな遊女と一緒にになれるのに、とさえつぶやくのである。また夫を異見し、ついには家を出た夫の後を一夜探しまわつた「心中重井筒」のおたつも、男を憎むどころか、むしろかばつて客に悪態をつく。「曾根崎心中」の遊女お初も、心の優しさや温かさをとりあげて描いてある。

近代にはいつて、封建制の崩壊は、底流としてわだかまる封建思想をすべくつがえずにはいたらなかつたけれども、西欧の新思潮の移入は自由平等への叫びとなり、人間性の至福な開花を追求しながら、社会と自我の対立を克服しようとする事になった。そこには封建社会の諸矛盾を打破するための反抗があり、人間開放への動きが文学の面にも取り上げられるようになってきた。

樋口一葉は、明治の女の悲しみと夢をうつつたえた。それは求めようとして求められぬ者の痛憤である。

自由が叫ばれ、ようやく自我に目覚め出した明治の女性達は、自己の環境の不合理に疑いをいだき、それを破つてより高い姿に自己を高めようと試みた。「或る女」に書かれた主人公早月葉子は、才気ある上層市民階級の女性として描かれているが、豊富な生命力と熱烈な生活願望を持ちながら、それを伸ばすに由ない環境のため無惨にも破滅してゆく。この明治の社会を背景として生きた葉子と、元祿時代に生きたおさんの生の姿とは、もとより異なつた見方を要するが、いずれも環境を自主的に克服できなかった無力な女性の社会的敗北を物語つ

ている。これははたして女性の責任であらうか、それとも男性をもふくめた社会の負うべき罪というべきであらうか。

けれども、私は単純な進歩主義にすべて同調しようとする者ではない。近松の作品から受ける感動の性質は、私をしばし立ちどまらせる。長い人類の歴史を通じて、女性の虐げられた不幸な受難を語ることはいくら強調されても充分すぎることはないであらう。しかし、その強調のゆえに、女性と男性とが同質の平等化を克ち得ることが、女性の戦いの勝利を意味するとすれば、はたしてそれは人類の幸福を保証することになるのであらうか。社会的には平等を、本質的には男女のそれぞれの生の充実をという、神の意志を忘却することは許されなと思う。女性が女性であるための最後の人間の性質とは、それではなんであらうか。これに答えることは至難である。けれども、私はいまゲーテの「ファウスト」の終章に歌われる神秘的な合唱の一句を思いうかべざるをえない。「永遠に女性的なるもの、われらを導きて高きに昇らしむ。」おさんによせる私の関心も、結局はこの言葉にみちびかれたものにはかならない。

(本学学生)